使命（要点）

○多様な神戸文化の特徴と東西文化交流の態様を明らかにし、地域の発展に役立つ「知の拠点」となります。
○優れた文化・芸術にふれあう機会を「提供」し、新たな調査・研究を「提案」し、その成果を「発信」する博物館となります。
○市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠りどころが得られる博物館になります。
○震災と復興のなかで得た知見を発信していきます。

活動指針

○市民が誇れる博物館　○すべての人々に親しまれる博物館　○地域の文化を支える博物館　○情報発信をする博物館

「神戸市教育振興基本計画」の４段階評価の基準に準じる

段階評価の基準について
A　目標が十分達成されている（9割以上）
B　目標がほぼ達成されている（7～8割以上）
C　目標の達成がやや不十分である（5～6割以上）
D　目標が達成されていない（5割未満）
F　評価が困難

活動目標	評価	内部評価 活動目標	活動目標◎	活動目標○	活動目標□
◎活動内容　【目標　計画】	評価				
○戦略・方向性	評価				

□指標	参考数値	評価			
	参照.比較値(過年度実績等)	目標値 a	実績値 b	達成率 b/a	コメント（必要な場合）

		活動目標	活動目標◎	活動目標○	活動目標□
地域の歴史情報や未来の指針が得られる博物館にします 文化財を保存・継承していく博物館にします	地域の歴史の調査・研究は、ほぼ計画通りに目標に向けて進捗している状況である。情報発信についても、半年間の休館中に例年とは異なる館外での講座、講演をより多く開催し、意義のある事業展開ができたと考える。今後も、より計画的、組織的に活動目標を達成するように努める必要がある。	A			
◎調査・研究を積極的に行います	調査、発信がより一層、組織的・計画的に取り組まれることが課題である。		A		
【目標　計画】　調査研究は収集、保存、展示などの博物館運営の基礎となる欠かせない活動であり、個々人の調査研究とともに、博物館としての組織的な取組についても活性化していく。その成果を諸活動に活かし、発信していく。					
○調査研究テーマの設定と方針の明示、実績の公開	調査研究活動はおおむね計画通りに進み、調査先や発信数も例年に比して遜色のない件数となっている。館全体の理解と協力のもとに組織的な取り組みで計画を進められるように引き続きの努力が必要。			A	
□調査研究テーマの設定	妙法寺調査　2回 綱敷天満宮調査　3回				B
□調査件数	21年度　40ヶ所 22年度　39ヶ所 23年度　33ヶ所 24年度　69ヶ所 25年度　74ヶ所				A

□指標	目標値 a	実績値 b	達成率 b/a	コメント（必要な場合）
□調査研究テーマの設定				年度当初にたてた計画のうち、神戸市内の寺社に関する資料調査については、ある程度達成することができた。しかし、館蔵品やそれ以外の施設が所蔵する須磨関係の資料の蓄積や、調査の情報発信などは達成できなかった。来年度以降は、須磨に係る市内調査を引き続き進めるとともに館外の資料についても調査をすすめていく必要がある。
□調査件数				1ヶ所の調査であっても重要な場合もあり、また館内での調査は対象外としているため、数字はあくまで目安程度であるが、本年は過去最高になった点、評価できる。公私のバランスなどの問題も含め、研究や展示の基本となる調査活動の活性化に向けて条件整備や姿勢について改めて考える必要がある。

		□研究成果発信数	21年度　67件 22年度　68件 23年度　69件 24年度　81件 25年度　60件	個人レヴェルを含めた研究成果の発信件数は、やや減少したが質的にはたかいレヴェルを維持した。博物館としては、所蔵資料や関係作品の調査をもとに、紀要・目録・博物館だよりの刊行、長崎歴史文化博物館、九州国立博物館での展覧会の開催、図録の製作などを通じ、調査研究の成果を発信した。				A
◎地域の歴史に関する情報を発信します			例年と比べ、半年間、空調設備改修工事のために休館したため館内での発信は十分ではなかったが、館外での事業を積極的に行い、意義ある取り組みとなった。			A		
多様な神戸文化の特徴を調査し、その成果を発信することは当館の重要な使命の一つである。地域に関する資料を収集、整理、保存し、また地域の歴史や地域に残る資料の調査などにあたり、その情報、成果を発信する事業などを恒常的に実施するとともに、有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域と期間を限っての調査活動を重点的に実施し、発信する事業にも取り組む。情報発信にあたっては、市民、利用者のニーズにあわせ、様々な媒体を使って積極的に取り組むとともに、成果を市民と共有していく手立てを講じることで、博物館が地域の発展に欠かせない存在になるよう寄与していく。								
	○有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域の歴史を調査し、その情報を発信する事業を展開		空調設備改修工事のため半年間休館し、また、大型特別展のみの開催となったが、様々な事業や館外での連携事業により例年と比べ、遜色のない取り組みが出来た。勤労市民センターとの連携は意義あるものとなった。今後ともより広い連携を進めていきたい。			A		
		□自主企画の特別展・企画展の開催	21年度：特別展2回、企画展4回、ギャラリー3回 22年度：特別展2回、企画展1回、ギャラリー3回 23年度：特別展2回、ギャラリー3回 24年度：特別展1回、ギャラリー3回 25年度：特別展、企画展とも0回、館外展示3回	4月8日から9月27日まで空調設備改修工事のために休館したため、博物館において自主企画の特別展・企画展は開催されなかった。但し、休館中に九州国立博物館において「視覚革命！異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館所蔵名品展―」（7月17日～9月23日）と長崎歴史文化博物館において「神戸市立博物館所蔵名品展　和ガラスのきらめき　びいどろの光・ギヤマンの粋」（4月6日～5月26日）を開催し、所蔵の名品を広く紹介した。また、図録も出版し、研究成果の発信ともなった。また、こうべまちづくり会館において「近代絵画優品セレクション」（8月1日～8月20日）を開催した。				A
		□その他関連事業の開催	平成25年度のおもな実績：ミュージアム講座6回のうち2回。こうべ歴史たんけん隊1回。各勤労市民センター・神戸市立博物館連携事業15回。	今年度は、空調設備改修工事のため、4月から9月休館。また、その後も、特別展示室、ホール、ギャラリーを使用する大型特別展が開催されたため、例年に比し、関連事業の開催が難しかった。 しかし、ミュージアム講座、こうべ歴史探検隊などの例年の事業に加え、館外で、各勤労市民センターとの連携で各地域に根ざした活動をおこなうことができた。今まで発信できなかった幅広い年齢層に地域の歴史や美術について理解を深めていただくことができ、意義ある取り組みとなった。				A
		□地域資料の展示	「近代絵画優品セレクション」 28点 「みてコレ」 ・銅製鍍金経箱（温泉寺伝来品） 2点	本年度は、4月から9月まで空調設備改修工事のため、休館しており、また、開館以降も大型特別展が続いたため、常設展示をのぞき展示できなかった。 みてコレでは地域関連資料を展示することができ、更に休館中の8月1日～8月20日にこうべまちづくり会館でおこなった「近代絵画優品セレクション」では、神戸ゆかりの画家の作品を多く展示することができた。				B
		□新聞雑誌や講演会での情報発信数	22年度:図録4、紀要論文4、だよりノート2、個人の館外発信29件 23年度:図録2、個人の館外発信22件 24年度図録3、研究紀要5、個人の館外発信数19件 25年度図録2、研究紀要2、個人の館外発信数20件	昨年度と比べ数値は前後するが、質的にも充実し、新聞雑誌の情報発信数は多く、所蔵資料について新たな研究成果を講演や論文等で市民に発信することもできている。また、長崎歴史文化博物館で、「神戸市立博物館所蔵名品展　和ガラスのきらめき　びいどろの光・ギヤマンの粋」(4月6日～5月26日)、九州国立博物館で「視覚革命！異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館所蔵名品展」(7月17日～9月23日)を開催し、多くの貴重な所蔵資料をより多くの方に情報発信することができた。				A

		□地域史に関する対応件数	21年度特別利用749件、うち地域史関係143件、その他15件 22年度特別利用:740件、うち地域史関係143件、その他16件 23年度特別利用:811件、うち地域史関係204件、その他15件 24年度特別利用:748件、うち地域紙関係138、その他17件 25年度特別利用:754件、うち地域紙関係133件、その他14件	例年どおり特別利用の件数も充実していた。また、各学芸員が、地域史や地域の資料についての様々な問い合わせに積極的に対応した。				A
	○関連資料ＤＢの構築		DBはまだ公開に至っていないため現在は評価できない。今後、DBの構築、公開にむけて引き続き作業を進める。					F
		□ＤＢの利用数	データベースの公開は0。	非公開の職員閲覧用の館蔵品データベースによる画像検索態勢は整いつつあるが、分野によってはまだ未入力・未整理のものもある。				F
◎「東西文化交流」と神戸の歴史に関わる文化財を永続的に収集します			購入予算は必要な資料の収集にはまだ十分とはいえないが、地域資料を少しずつ収集できているのは、当館の活動に対する所蔵者や市民の信頼や理解があってのことといえる。今後とも各方面の理解を得て収集が図られるよう努力を継続していく必要がある。			A		
【目標　計画】 神戸の地域関連、あるいは東西文化交流に関わる資料について、その散逸を防ぎ、可能な限り収集するのは、博物館の重要な機能のひとつである。価値の高い資料を分野に偏ることなく収集することが求められる。								
	○特色ある館蔵品等の充実、収集方針の明示と実績の公開		購入予算は必要な資料の収集にはまだ十分とはいえないが、地域資料を少しずつ収集できた。				A	
		□資料収集数（購入）	21年度:2件2点369千円、 22年度:9件１１点40,549.48千円、 23年度:10件3,118,448千円 24年度:16件12,437,750円 25年度:7件834,300円	歴史資料3件399,300円、美術資料3件315,000円、地図資料：1件120,000円、合計7件834,300円を購入した。歴史、美術資料、地図資料ともに、当館の収蔵品として相応しいものを購入することができた点十分に評価できる。				A
		□資料収集数(寄贈)	21年度:43件369点　評3,916千円 22年度:12件5076点　評40,090.9千円 23年度:10件　評805,342千円 24年度:6件752点 評1,376,9千円 25年度:4件4点　評30千円	収集資料について、資料カードの充実、保存と活用（資料台帳、データベース、収蔵庫内検索）を計画的にすすめ、安全で適正な収納と館内でのデータ共有化をはかる必要がある。				A
		□資料収集数(寄託)	21年度0件0点 22年度:歴史、美術資料6件8点 23年度:0件0点 24年度:歴史資料1件3点 25年度:0件0点	本年度は、資料の寄託がなかった。来年度以降、収蔵庫の容量、環境も考慮に入れた上で寄託に対する考え方を検討していく必要がある。				C

◎社会的資産としての文化財（館蔵品）を保全し、後世に伝えます		限られた予算や態勢の中で文化財保全の努力を重ねてきている。本年度は、空調設備改修工事の結果、展示室及び４階収蔵庫の環境が大きく改善できた点は評価できる。引き続きハード及びソフト両面についての文化財保全のための環境改善に努めていく。また、阪神・淡路大震災20年を来年度に迎えることを機に、危機管理についてもあらためて検討する必要がある。		A		
【目標　計画】 収蔵資料の永年保存は他の公共施設と一線を画する博物館の中核機能である。しかし、博物館に収蔵されている資料も、ひとたび注意を怠れば、重大な破損・滅失の危機に直面する。化学的殺虫殺菌処理にたよらない、日常的な監視態勢と迅速適切な処理（IPM）が、博物館・美術館業界の資料永年保存の標準となっている昨今において、その完全な遂行は博物館の重大な使命として位置づけられる。						
	○方針の明示 ○良好な収蔵環境の整備	モニタリング、生物環境調査、清掃などは計画通り適正に実施した。収蔵庫においては虫類の発生がほとんど見られない結果にある。引き続き収蔵庫の良好な環境維持のため、設備の改善を含めて検討、実施していく。			A	
	□収蔵（保存）環境の調査・整備（IPM）	温湿度測定　毎週×3ヶ所 虫類のモニタリング　6回×49ヶ所 生物環境調査　9月・11月実施、2月に追加調査（収蔵庫・喫茶室） 収蔵庫定期清掃　全面2回ほかモニタリング結果に対応して複数回実施 殺虫作業　1回　燻蒸作業　1回	モニタリング、生物環境調査、清掃、殺虫・燻蒸作業はいずれも計画通り、また、モニタリングの結果に応じた追加措置も含めて適正に実施した。今年度は、空調設備改修工事のため全館、特に収蔵庫は例年の環境と異なり、環境の維持が困難であり若干の問題が発生したが、迅速かつ適正に対処できたと考える。空調設備改修工事により展示室及び4階収蔵庫の環境が改善されたことは評価できる。来年度以降は、4階収蔵庫以外の環境の環境の改善に引き続き努めていく必要がある。			A
	○資料の保全	限られた予算であるが、優先順位の高いものから順次補修を勧めていく流れが出来つつある。くわえて、補修以前の取り組みの充実が必要。			A	
	□資料の補修	20年度：169点 21年度：315点 22年度：35点 23年度：79点 24年度：7点 25年度：4点	25年度は、24年度から継続の1点をあわせて4点を補修した。限られた予算の中で、資料の状態等を考慮しながら、緊急度の高い資料について実施することができた点評価できる。			A
	○大震災による被災の教訓と復旧・復興の記録の公開	阪神・淡路大震災から来年度で20年を迎えることを機に、被害と復旧の実態に対して再び関心が高くなっていると思われるが、市役所全体のシステム変更によりホームページ上で公開している震災の記録の利用件数の測定が不可能となっている。			F	
	□大震災の記録の利用	16年度:11717件 17年度:10683件 18年度:12857件 19年度:13272件 20年度:11778件 22年度:9747件 23年度:10932件 24年度:11447件 25年度:不明	震災の記録についての問い合わせは多く、ホームページを紹介し、利用していただいている。しかし、今年度から市役所全体のシステム変更によりホームページへのアクセス件数がカウントできなくなったため利用数の測定は不可能となった。			F
◎館蔵品に関する情報開示の整備をおこないます		館蔵品目録、特別利用など定型的な業務としての情報公開は計画通りに実施されたが、より多くの資料のＨＰへの画像掲載にむけ引き続き準備を進める。		B		
【目標　計画】　博物館の所蔵品は神戸市民、そして本市の歴史文化と東西文化交流に関心を寄せる全ての人々の共有財産であるとする観点から、その情報を可能な限り公開することが望まれる。特にインターネットを媒体にしたデーターベース公開の実現を目指すべきである。						
	○館蔵品情報の継続的な発信	目録など印刷物での情報公開は計画通りに実施され、特別利用も十分に活用されている。ＨＰへの掲載（資料画像）追加は計画通りにはならなかったが、準備は大幅に進展している。			A	

		□館蔵品目録の継続発行	美術の部・歴史の部各1冊を刊行	美術の部・歴史の部各1冊を刊行	美術の部・歴史の部各1冊を刊行	100%	目標どおり、紀要、目録（美術・歴史）を紙媒体で発行し、年報はPDFファイルで作成し、ホームページで公開した。				A
		□館蔵品の特別利用数	25年度：754件2,494点	650件 2,480点	754件 2,494点	116 % 101 %	市内外の利用申し込みに可能な限り迅速に対応・処理した。				A
		□ホームページへの掲載		びいどろ史料庫コレクションのなかから、名品10点ほどの画像を掲載。また26年度より公開予定のGoogleアートプロジェクトへの参加準備作業を行った。							B
	○博物館資料DBの構築		データーベースの公開について、最初から全てをおこなうのではなく、24年度から公開し、好評を得ている名品撰の大幅拡張という方向性も肯定的に検討していく。							F	
		□データーベースのアクセス件数					データーベースの公開については、その基幹となる画像アーカイブの構築が急務だが、神戸の地域史に関わる資料の入力で一部進捗が止まっている分野（絵葉書・古写真・絵地図・池長孟関連資料など）があり、その作業完了が26年度の優先課題と思われる。コストやさまざまな規制がかかるデータベース公開だけが唯一の選択肢ではなく、24年度から公開の新名品撰への反響が大きかったことから、コスト的な懸念が皆無の「名品撰の大幅拡張」というオプションについても、肯定的に検討すべきである。				F
すぐれた芸術・文化に出会える博物館にします			空調設備改修工事を完了させ、安定した温湿度でプーシキン美術館展、ターナー展を開催することができた。ロシアに渡った17～20世紀のフランス絵画の名品を展示し、特に質の高い印象派絵画の数々を紹介することができた。神戸でフランスもうらやむ絵画コレクションを展示した意義は大きい。テート美術館の至宝であるターナーの大作、水彩の数々を展示した。世界的名品だけでなく、まちづくり会館で所蔵の近代絵画の優品を展示し、神戸ゆかりの芸術にふれる機会をつくったことは評価される。						A	
◎楽しく学べる魅力的な常設展示を行ないます			工夫や努力による展示の改善には限界がある。展示テーマやパネルなどが旧態依然のままであり、大幅なリニュアルに向けて検討する場が設けられ、将来に向けてのプランづくりに着手できたことは評価できた。							A	
【目標　計画】　常設展示（ギャラリーを含む）は館の特色を最も発揮し、展示活動の基本となるところである。日常的な取り組みの活性化を図るとともに、学習室を除いて大幅なリニュアルが行われていない現状を踏まえ、将来に向けた準備も行っていく必要がある											
	○常設展示の内容の更新・拡充・整備		展示替え、展示方法の工夫など、より魅力ある展示にするために努力が行われているが、展示設備や施設のリニュアル等、経費が必要な部分について検討されていない。							A	
		□展示替え	23年度：24回 24年度：23回 25年度：12回	最新の研究成果を反映し、実物を通して常設展のテーマを理解していただくために、当初の予定どおりの展示替えをおこなうことができた。							A

		□常設展示内容		展示資料を補助する写真パネルを添えたり、キャプションや説明文を平易な文章で記すなど、資料をより身近に感じてもらうために、各自工夫を重ねた。原始・古代の展示では親しみやすいイラストを多用して改装を実施した。ギャラリーでの企画展示など、ギャラリートークも含めて、来館者から好評をいただいた。また、常設展示改修に向けて常設展示検討委員会を16回行い、予算要求をおこなった。来年度も引き続き、検討を行い、常設展示の充実に努めていく必要がある。							A
		□展示解説開催数	21年度:84日　294人、平均3.5人。 22年度:84日、873人、平均11人。 23年度:61日、271人、平均4.4人。 24年度:69日、321人、平均4.7人、参加者のいない日数15日。 25年度:13日、 49人、平均3.16人、参加者のいない日数3日。	参加者1日平均5人程度	平成25年度:実施日数13日参加者数49人、平均3.76人、参加者のいない日数3日。	75%	今年度は、4月から9月が空調設備改修工事のために休館となっており、例年にもまして常設展のみの開館日数は少なく、参加者総数、一日平均の参加者数も減少した。				B
		□展示設備・施設の改修	検討委員会開催回数　25年度：16回	空調設備の改修により特別展示室、収蔵庫の環境が大きく改善された。常設展示の改修に関しては、内部での検討会を16回おこない、改修の大きな方向性を決定した。							A
◎特色ある館蔵品を活かした展示を行います			空調設備改修工事のために半年間休館し、数年前から予定していた大型特別展のみの開催となり、結果として館蔵品を展示する自主企画展は開催できなかった							F	
【目標　計画】　特色あるコレクション、調査研究の成果を生かした展示は博物館の基本となる活動であり、館の力量が問われるところである。常設展示（ギャラリーを含む）以外に、南蛮紅毛美術、古地図などの企画展、調査研究にもとづいた自主企画の特別展をそれぞれ少なくとも年間1回は開催し、魅力を発信する。											
	○調査研究に基づく自主企画の特別展・企画展の開催 ○南蛮・古地図の企画展の開催		空調設備改修工事たのめ半年間休館し、特別展は大型巡回展だったため、自主企画の特別展、企画展は開催されなかった。							F	
		□展覧会開催		空調設備改修工事のための半年間の休館により本年度は自主企画展は開催しなかった。							F

		□入館者数					空調設備改修工事のための半年間の休館により本年度は自主企画展は開催しなかった。				F
		□満足度		自主企画展の開催がないため、測定不能。							F
◎海外展などの特別展を開催します			目標とする入館者数は得られなかったが、プーシキン美術館展ではロシアのコレクターの収集の有り様を、ターナー展では英国の水彩画の画業をたどることで、海外の美術館の持つ魅力を神戸市内外の人々に広く周知することができた。						A		
【目標　計画】　博物館は人々がすぐれた文化財と対話できる場でなければならない。国内外の博物館施設、または新聞社等のマスメディアと共同し、質の高い大型展を年に1～2回の頻度で開催する。そのための財源確保、広報計画など広範囲な業務を事前の計画の下、実施する。											
	○国内外のすぐれた資料、作品を展覧会で紹介		空調設備改修後における下半期に、プーシキン美術館展ならびにターナー展を開催し、神戸市内外の人々に提供することができた。目標入館者にはいずれも到達しなかったが、有料率が高かったことが特筆できる。							A	
		□特別展開催	「プーシキン美術館展　フランス絵画300年」 平成25年9月28日～12月8日 「ターナー展　英国最高の風景画家」 平成26年1月11日～4月6日	プーシキン美術館展ならびにターナー展を開催し、神戸市内外の人々に提供することができた。目標入館者にはいずれも到達しなかったが、有料率が高かったことが特筆できる。							A
		□入館者数	「プーシキン美術館展」 「ターナー展」	230,000人 (3,709人／日) 220,540人 (3,243人／日) ※26年3月31日まで 計　450,540人	183,480人 (2,965人／日) 151,267人 (2,160人／日) ※26年3月31日まで 計334,747人	79% 68% 計74%	両展覧会ともにわずかに目標入館者には達しなかった。				B
		□満足度	24年度:「南蛮美術の光と影」86.6、 「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」85.7 「マウリッツハイス美術館展」81.6 25年度:「プーシキン美術館展」82 「ターナー展」81	本年度は、大型の西洋絵画展を2回行ったが、82～3という顧客満足度となった。前年のマウリッツハイス美術館展よりは上回ったが、85以上を記録した南蛮・銅鐸特別展には及ばなかった。24年度末に行った「中国 王朝至宝展」の満足度がマウリッツハイス展と同等だったので、集客の多い展覧会ほど満足度が落ちるという説は単なる印象論にすぎない(現に、26年度の北斎展は、会場の混雑ぶりにもかかわらず、85以上の満足度を維持している)。 プーシキン展・ターナー展ともに、満足度がやや向上した要因としては、(1)運営業者の接客姿勢の違い(2)室内空調の改善が大きい。作品の質についてはマ展と大きな差はない。また、マウリッツハイス展での反省もふまえ、作品照明の改善も行ったので「展示の見やすさ」という点でも満足度の若干の向上が見られた。							A
芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします			半年間の工事休館期間が、例年に比べて地域との連携、他の博物館との連携強化に繋がったという面もあり、今後はこのような連携を継続できるよう計画し、努力することが必要であろう。学校との連携では、出張事業などの回数はほぼ限界に達しており、その内容の見直しや新規プログラムを開発する余裕が無くなってきている実情もある。学校等との連携については、人的および時間的な事業計画の見直しを行う時期に来ている。						A		

◎学校との連携を図ります	学校との連携は図れている。交流できる博物館としての機能は十分に果たしているので、今後とも博物館活動の柱の一つとして維持、充実を図れるように努めたい。			A	
【目標　計画】　博物館が所蔵している特色ある資料をもとにした教材の開発や展覧会独自のワークショップ等を行い、来館者への機会の提供かつ出張授業等に積極的に取り組むことが博学連携の在り方としては不可欠となっている。将来に向けても学校と連携を図り利用の場としてあるように、プログラムの蓄積と整備を計画・実施していく必要がある					
○学校との連携	「学社融合」に立脚して、学校との連携は十分に行っている。今後とも新たなプログラムの開発など、ソフト・ハードの整備に努める必要がある。			A	
□小・中・高等学校の受入数	※21年度から25年度までの実績値は、以下のとおり。単位は校。 幼稚園　21:1、22:1、23:0、24:0、25:0、 小学校　21:52、22:52、23:47、24:4、25:25 中学校　21:57、22:83、23:165、24:80、25:50 高等学校　21:20、22:44、23:49、24:26、25:19 その他(大学･専修学校など) 21:23、22:55、23:54、24:62、25:15 トライやる 21:14校27人、22:13校30人、23:15校29人、24:13校28人、25:11校19人 合計　21:167校、22:248校、23:330校、24:185校、25:120校 人数合計 21:6,839人22:9,577人　23:10,681人　24:7,942人　25:4,972人 過去5年間の平均校園、人:210校、8,002人	前半期工事の為休館ではあったが、後半期より学校園の要望に沿ったかたちで、来館への対応(幼稚園0 、小学校25 、中学校50 、高校19 、その他15 計109校園4953人)、オリエンテーション(来館校園のうち25%)、またトライやる(11校19人)の受入など、適切な受入が図られている。			A
□連携数（出張授業等のアウトリーチ数、教材の貸出数）	※単位は校 21年度　幼：0　小：64　中：10　高：2　計76 22年度　保：1　小：8　中：14　高：2　大：1　計105 23年度　幼：0　小：23　中：18　高：6　大：4　計52 24年度　幼：0　小：95　中：14　高：1　特別支援：1　計111 25年度　保：1　小：103　中：12　高：0　特別支援：2　計118 5年間の平均　幼･保：0.4　小：58.6　中：13.6　高：2.2　大：1　特別支援：0.6　計76.4	例年よりも連携授業数は多かった。また可能な限りでの広報活動や学芸員と指導主事の体制づくりを進めることができた。保育園1、小学校103、中学校12、高等学校0、大学0、特別支援2　合計118校			A
□教員研修の受け入れ	21年度　8回44人 22年度　5回301人 23年度　5回157人 24年度　8回392人 25年度　3回114人 5年間の平均5.8回　201.6人。	前半期の工事休館のため、例年よりも研修の受け入れは少なかった。 ①高倉台小校内研修24名、②市立高校芸術研究部研修会18名、③中学校社会科研究研修会72名			A

		□大学との連携事業数	21年度:20校34名 22年度:16校28名 23年度:18校29名 24年度:17校26名 25年度:16校21名 5年間の平均17.4校27.6人。	博物館実習のカリキュラムは例年とほぼ同じである。本年度は改修工事中のため、実習生が常設展示を含めて展示を見学する機会がなかったが、館外展示の補助や清掃など、休館中ならではの体験も織り込んだ。 来館見学は、工事中で見学ができないために今年度は2校にとどまった。				A
	○教育普及プログラムの確立		文化庁の補助事業の補助金により、普及プログラムの維持・充実が図られていることは望ましいあり方である。しかし、今後は博物館・美術館の連携によるプログラムの開発にあわせ、予算措置については自助努力する必要がある。				A	
		□教育普及プログラム数・内容更新	25年度実績(連携授業:幼稚園1園、小学校108校、中学校17校、高等学校1校　大学0校、特別支援1校)	予定通り制作し、連携授業や学校団体来館時に活用することができた。連携授業に関しては昨年度を上回る実施数である。年度当初に予約が殺到し、要望に応じられない学校が多くあるため、今年度から4月当初の予約は一校につき3種類までに限定し、少しでも多くの学校の要望に応えられるようにした。				A
		□子供向け事業の展開	子供むけチラシやホームページ・広報紙KOBE上での広報活動	定例的な事業については例年どおり円滑に実施されている。展覧会に付帯する臨時の事業については、より一層周知を図り、事業に努めることが肝要である。今年度も、ホームページ・広報紙KOBE上での広報活動を行うことができた。				A
◎地域との連携を図ります			生涯学習の推進という点ではいきいき勤労財団の申し出によって連携事業を実施できたことが大きな成果であった。今後も継続と地域との連携が望まれる。			A		
【目標　計画】　博物館はその立地する地域と不可分の存在である。博物館は地元の文化財のみならず、生活する人々とその活動すべてに関わりをもたねばならない。博物館はその事業を計画・実施する際に地域の学校や社会教育施設、文化団体、商業施設やマスコミなどと連携を重視しなければならない								
	○居留地協議会、周辺商店街等との連携		地域あるいは近隣の博物館との連携は例年通り進めることができた。また、空調工事のための休館中にいきいき勤労財団と連携ができたことは評価できる。				A	
		□連携数など	みなと銀行本店来客ロビーのポスター掲示版に「プーシキン美術館展」(2013年10月)と「ターナー展」(2014年1月)ポスター掲示。 神戸ビエンナーレ2013とプーシキン展との相互割引。 勤労市民センターとの連携：16回、参加人員のべ485人	みなと銀行、神戸ビエンナーレとの連携が図れた。また、いきいき勤労財団と連携し、各勤労市民センターで学芸員による講座を16回おこない、485人の参加人員を得たことは大きな成果といえる。来年度以降も地域との連携を深めていきたい。				A
		□共催事業など	①特別展「プーシキン美術館展　フランス絵画300年」記念講演会 「革命前夜のロシアにおけるフランス絵画の受容とその波紋」神戸市外国語大学ロシア学科准教授　北見諭氏(10月20日) ②勤労市民センター連携事業(全15回) ③しあわせの村開村25年記念博物館が村にやってきた 8.10・11　ワークショップ「古代の生活を体験しよう」 8. 10　講演会「プーシキン美術館展～フランス絵画300年の歴史を語る～」 岡	空調工事にともなう休館中、勤労市民センターとの連携事業として講演会を15回開催、神戸外大との連携としてプーシキン展において講演会をしていただくなど、今年度は各種団体と充実した共催事業が実施できた。				A

	○生涯学習の支援		数値は、年度により多少上下するが、要望には十分対応できている。今後は、より有意義な連携の取り方について検討が必要。				A	
		□連携数（出前講座・講師派遣など連携事業数）	21年度　15件 22年度　25件 23年度　23件 24年度　31件 25年度　30件	神戸市外国語大学と引き続き協定に基づき、相互に連携、協力した。また、大学での非常勤講師、地域への講師派遣ともに例年どおりおこなった。				A
◎他の博物館・美術館との連携を図ります			長崎歴史文化博物館、九州国立博物館2館への一括コレクションの展示は、他地域への神戸市立博物館の魅力の発信として大きな成果であり、学芸員相互の交流が図られたものと考えられる。			A		
【目標　計画】　博物館は単独では存続し得ず、常に同じ博物館相当施設と連絡と協力をしなければならない。それは日本国内のみならず広く世界的な範囲で交流すべきで、そのためには館を支える学芸員の切磋琢磨とそれを支える体制作りが必要である。								
	○他の博物館・美術館等との情報交換、連携事業の展開		一般の館外貸出については例年どおりであったが、空調設備改修工事にともなう休館中に長崎歴史文化博物館、九州国立博物館2館、こうべまちづくり会館での展示が行え、館蔵品の魅力を地域に広く発信できた点は特筆に値する。				A	
		□他館での館蔵資料の発信	平成23年度：申請数31件（貸出先32件）135点 平成24年度：申請数30件（貸出先33件）153点 平成25年度：申請数27件（貸出先27件）556点	4月から9月の間、空調設備改修工事のために休館であったが、貸出件数は過去最高となり、他館において当館資料の発信が十分おこなえた。				A
		□他館での委員、講師など	他館での評価委員、講師、他都市審議会委員など 20年度　22件 21年度　15件 22年度　17件 23年度　25件 24年度　28件 25年度　14件	依頼に応じて専門性を活かした委員・講師などの活動を実施している。				A
		□他館との共催事業	①長崎歴史文化博物館と共催・協力して、企画展　神戸市立博物館所蔵名品展「和ガラスのきらめき―びいどろの・ギャマンの粋」展開催(4/6～5/26)。②九州国立博物館と共催・協力してトピック展示「視覚革命！　異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館所蔵名品展―」を開催(7/17～9/23)。最初の展示・展示替え・撤去に学芸員が出張。記念講演会「奥行きの発見―18～19世紀の日本の洋風表現」講師：岡部長(8/4)、ミュージアムトーク・特別編「舶載蘭書と洋風画」講師：勝盛学芸員(8/20)をおこなった。③九州国立博物館と共催・協力して、特別公開「国宝・神戸市桜ヶ丘出土銅鐸」を開催(7/17～9/29)。子ども向きワークショップに橋詰学芸員が講師となり実施。④まちづくり会館と共催・協力して「神戸市立博物館所蔵　絵画セレクション―懐かしき神戸のおもかげ―」を開催(8/1～8/20)。講演会「神戸の近代絵画と市立博物館」を、廣田係長を講師として開催(8/3)。⑤「プーシキン美術館展」展の図録作成・執筆を他の会場館と分担しておこなった。⑥東京都美術館と協力して「ターナー展」を開催。図録執筆・講演会も協力。⑦九州国立博物館と協力して「銅鐸」の調査を実施。	今年度は、空調設備の改修に伴う休館のため、他館との連携を積極的におこなった。今後も様々な連携にあり方を探り、積極的な情報発信に努めたい。				A
◎各種講座を一層充実します			例年通りの講座にとどまっているが、継続することによって、市民や受講者に広く認知されていると考えられる。引き続き講座を一層充実させるためのさらなる努力を継続的におこなう。			A		

【目標　計画】　生涯学習の場として、博物館は社会教育施設のなかでも欠かせない存在である。来館者に対して講座等を積極的に行うことで、展覧会理解、館蔵資料、各自の研究成果を発信し、博物館の魅力を伝えていく									
○講座内容の開発、充実	各種講座やギャラリートークの実施によって、生涯学習の場としての機能は果たせていると思う。また、これらの講座を通して、館蔵品の魅力も発信できている。今後は、新たな講座の開発にも力を入れるべきと考えられる。							A	
□事業数	ミュージアム講座　6回	ミュージアム講座に比べ人数を限定し専門的な内容で開催する講座・「博物館をたのしむ」は空調設備の改修に伴い、25年度は未開講。							A
□参加者数	10月17日（木）「プーシキン美術館とは何か」（塚原） 11月21日（木）「近代遺跡の保存と活用―戦争で廃止された二つの施設―」（東） 12月19日（木）「考古学のはなし」（菅本） 1月16日（木）「ターナーとロマン主義絵画」（廣田） 2月20日（木）「古地図を出版した本屋さん」（国木田） 3月20日（木）「西洋の美　日本の美・その特質を語る」（岡）	ミュージアム講座170人	ミュージアム講座172人参加（申し込み212人）	当初計画どおり開催。	定例の講座に加え、イヴニングレクチャーなど気軽に参加できる講座を展覧会ごとに継続して開催していくことが必要である。 また、事前募集型の講座については、参加者が固定化しないよう、広報手段を検討し、新規かつ若年・中年層の参加者を増やすことが必要である。				A
□利用者満足度	「ミュージアム講座」のアンケートを実施。各講座最終回においてアンケート調査。	受講者のアンケート結果は概ね好評であった。							A
◎広報活動を充実し、各種事業を広く紹介します	様々な広報メディアへの対応が必要ではあるが、近年のアンケート結果なども踏まえて、労力を集中すべきメディアを見極める必要がある。特に最近ではインターネットの影響力が高まっているので、これに的確な対応を行いたい。							A	
【目標　計画】　博物館の基本活動は文化財の収集と保存、活用である。それらの活動は今に生きる人々に理解されることによって、いっそうの発展を遂げることができる。そのためには、展覧会広報のみならず、博物館活動すべてをあらゆる媒体を通じて知らしめる必要がある。									
○広報活動の充実	各メディアの配布部数や掲載料の有無なども考慮に入れて、効率のよい広報活動を展開することに引き続き留意していきたい。対応回数が多い割には効果が低いと考えられる媒体への対応の効率化が当面の課題。							A	
□広報掲載件数	昨年度よりもインターネット上の各種展覧会情報サイトへの情報提供が増えた。だたし、この種のサイトは当館から直接情報を入力せねばならないため、館側の負担も増えた。展覧会でのアンケート集計を参考に広告効果の薄い媒体について精査する必要がある。								A
○ＨＰの更新	昨年度並みの更新頻度とアクセス数が確保できた。今後は、Google, FacebookなどSNSの活用で、情報発信とそのフィードバックを確実にする手法も検討すべきである。							A	
□HPの更新回数、ページ数、アクセス数	博物館HPアクセス実績 23年度　1,639,886 24年度　3,376,130 25年度　測定不能	広報課がアクセスツールを改変したため、25年度アクセス権数は測定不可能となった。							F

◎市民ニーズを把握し、必要な改善を行ないます		アンケートの回収・集計については、それだけを目的化することなく、得られた情報の迅速な分析と共有が課題である。		C		
【目標　計画】　博物館は地域とそこに生活する人々のために存続しなければならない。文化財の保存とそれを利用した諸活動は相互に補完しあわなければならないが、さらにそれらは市民のニーズに応えるものであることが理想であり目指す目標といえよう。市民ニーズの把握のためのツールを持つことと、その分析、さらにはその活用を図らねばならない。						
○定期的な利用者へのアンケート調査 ○非来館者を含めた意識調査		アンケート調査については、投げ入れ式で実施し、回収後はただちに職員間で情報共有し、そこに記された意見については迅速に対応した。集計作業については交流員、トライやる・ウィークの生徒たちの労力を活用することである程度迅速には行えた。今後はアウトソーシングも含めて検討すべきである。アンケート結果の分析と活用については、すくなくとも展覧会会期前半での速報と、最終決算実行委員会での総括に必要な情報がまとめられるように態勢を整えたい。			B	
	□アンケート調査に基づくニーズ・満足度の把握		両展覧会ともに全日の回収と全体満足度を計算。その他の項目についても期間中に速報値を算出し、運営の参考とした。裏面のお客様の声についてはすべてPDF保存するとともに、各展覧会運営事務局にもコピーを回し、情報共有に務めた。ターナー展においては、決算委員会において全集計結果と来館者動向について共催各社で共有することができた。			A
	□HPへの掲載・公開		館内での「公開の是非」の検討が必要だが、公開を積極的に推進すべきだとする意見は聞かれていない。また民間他社との共催事業についての満足度の公開については制約が大きいものと考えられる。			C
	□アンケート評価への対応と改善		アンケートに記入された内容で、すぐに対応可能なこと(キャプションの誤記、設備の不具合など)は、改善・実施した。運営に対するご意見も関係先に迅速に伝達した。			A
◎ボランティア活動を通じて、人々が交流できる場を作ります		交流員の活動が定着することにより来館者をはじめ人々が交流できる場を提供できている。六甲アイランドにおけるアートカプセル等の活動も定着してきた。今後とも質・量ともにボランティア活動の一層の充実に努めたい。		A		
【目標　計画】　博物館運営のなかで、人々が交流できる場としてボランティアは一つの姿となりつつある。しかし、単に業務の代替を求めるのではなく、独自の運営形態を職員・ボランティア相互で生み出す必要がある。また、活動を円滑に進めるために、ハード・ソフト両面において整備を図る						
○ボランティア活動の実施		年度ごとに着実に実績があがってきているが、ボランティア各人により取り組みへの積極性が異なる。この点が運営上の課題である。			A	
	□実績（人数、回数、内容）	21年度　のべ352人/活動回数85回 22年度　のべ719人/活動回数141回 23年度　のべ502人/活動回数170回 24年度　のべ643人/活動回数126回 25年度　のべ729人/活動回数120回	平成20年度に導入して6年目となり、活動回数や活動参加総人数が増加してきた。また、自主的な活動が徐々に行われるようになり、学習支援交流員の活動が根付きつつある。休館中は、ワークショップで活用するツールの開発などのために活動した。その結果、今年度は休館にも関わらず参加人数が過去最高となった。			A
○活動内容の充実		学習支援交流員が企画・運営するワークショップや博物館が主催する体験講座や講演会などの補助に加え、小磯記念美術館など活動内容が一層充実してきた。			A	
	□活動内容		学習支援交流員が企画・運営するワークショップや博物館が主催する体験講座や講演会などの補助が活動の中心となっている。これに学習室での学習支援と交流、館内案内も加え、活動の大きな柱として位置づけることを目標に活動を展開した。			A

すべての人々にやさしい博物館にします		施設・設備の改修が必要な箇所はまだ多くあるが、空調設備の改修を終え、人用エレベーターの改修等も26年度に予定されている。ただ、来館者の苦情の多くが会場の狭さやトイレの少なさなどであり、常設展示のリニューアルを見据えながら、ユニバーサルデザインへの対応を含め、必要な施設、設備の改修をすすめていく。	B			
◎誰でも利用しやすい施設、設備にします。		障害者用トイレやスロープ等最低限の施設、設備は備えているが、全ての来館者を満足させるには施設・設備のリニューアルが必要である。今後の展示のリニューアルに際し、施設・設備のリニューアルもあわせて検討する必要がある。		B		
【目標　計画】これからの博物館は、高齢者・障がい者・外国人等誰でも利用しやすい施設・設備にしていく必要がある。そのためにユニバーサルデザインへの対応に向け、リニューアルを含め、施設・設備の総合的な改修案を立案し、具体化していく必要がある。						
	○施設の計画的な補修、改修	上半期は空調設備の改修工事のため、休館したが、秋以降は予定の展覧会を無事開催できた。			B	
	○省エネルギー・省資源への取り組み	空調設備の改修は無事終わったが、施設・設備の改修の必要な箇所は、まだ多く残っている。当面必要性が高い、人用エレベータ、屋上防水、非常照明用蓄電池の交換が26年度に実施される予定で今後もできる範囲で予算の確保に努めていく。			B	
	□消防・建築設備等の点検、訓練、安全衛生の確保		収蔵庫消火用ハロンガスボンベバルブ点検取替えを無事に終了した。今後も消防放送設備が30年前以上のものなので、更新できるよう努力していきたい。			B
	□神戸環境マネジメントシステムを生かした環境負荷の低減		休館期間があったため、小中学校への環境負荷低減の説明等は減少したが、その他はおおむね目標をクリアできた。			C
	○ユニバーサルデザインへの対応	空調設備の改修にあわせて、ユニバーサルデザインの観点から一部改善の案もあったが、予算上の制約から実施できなかった。			B	
	□ユニバーサルデザイン取組		ユニバーサルデザインの最低限の設備はあるが、将来的にはオストメイト等設備の充実を図る必要がある。			B
◎誰にでも喜ばれるサービスを提供します		スタッフ一同入館者が来館してよかったと思っていただけるよう努力した。ただ一部の日で、待ち時間がでるなど施設の大きさの問題もあり、すべての方に喜んでいただけなかった。展覧会により差があるが、9割以上の方が「問題がない」や「よかった」といっていただいたが、一部の方から批判を受けた。会場の狭さに起因するものも多く、今後の検討課題である。		B		
【目標　計画】これからの博物館は、誰からも喜ばれるサービスを提供し、利用者から高く評価される博物館にしていく必要がある。そのためには、まず、仕事量に見合った職員・スタッフ数の確保、次に、それらの職員の能力を高めるための研修を実施していく必要があるが、まずは、この前提となる予算の確保が急務である。						
	○人的サービスの充実	空調設備改修工事のため、開館期間が例年の半分程度になった。ただ、スタッフの対応が普通、よかったの割合が90%を超えており、来館者には満足いただいたと考えている。ただ、苦情の多くが、会場の狭さや、トイレの少なさ、設備的なものが起因となっている。今後のリニューアル計画の中での検討課題でもある。			B	
	□館内の運営協力体制		スタッフの人数の制約もあるが、できるだけ誠実に対応しており、入館者のスタッフへの評価も高い。			B
	□職員の研修		財政上厳しい中、ほぼ要望どおり、研修等には参加できた。今後とも必要な研修等については、参加できるように努めていきたい。			B
	□利用者サービス		空調設備の改修が完了し、大規模海外展開催の今後の見通しもついた。ただ、多数の方の入館が予想されるため、施設全体のリニューアルの必要性を今後も発信し続けたい。			B

◎予算の充実に努めます		ハロン消火設備の改修工事を行った。		B		
【目標　計画】　　市の予算は、非常に厳しいものがあり、毎年減少していている。そのため、博物館に必要な予算を獲得していく努力をこれまで以上にに行うとともに、外部からの支援金・助成金の獲得に向け、積極的に行動していくことが必要がある。						
	○予算の充実	必要最低限の予算は獲得できた。また、空調設備の改修について前年度に引き続き今年度工事分が予算化された。運営に必要最小限の予算は獲得できた。今後も引き続き予算獲得の努力は続けたい。			B	
		□支援金･助成金の獲得	大規模海外展は新聞社が窓口であり、その間の短期間の常設展のみのため、博物館では今回は支援金や補助金は受け入れていない。助成金・補助金をいただけるよう、よい展覧会企画を作るとともに、よりよい関係の構築に努めたい。			B
	○活動指標の内部評価と外部評価の実施	委員、職員のがんばりで評価をこなしているが、従来の仕事に加え点検評価を行うため、協議会委員や職員には従来以上の仕事量になっている面もある。評価にあたってできるだけ簡単な指標を用いるなど工夫が必要となる。			B	
		□自己点検、評価システム	計画通りに事務が進まない問題点があり、事務が煩雑にならないような工夫や改善が必要。またこの自己点検評価を有効に活用していくため、計画、目標の設定時点での十分な意見交換など、充実を図っていくとともに、今回が5回目の自己点検評価となるため、今後の修正・改善に向けて検討を進める必要がある。			B